

## 薬局薬剤師による吸入指導時に医療機関への情報提供が必要となった事例の特徴について

石田 光里<sup>1)</sup>、緒形 富雄<sup>2)</sup>、佐藤 絵馬<sup>3)</sup>、前田 守<sup>4)</sup>、長谷川 佳孝<sup>4)</sup>、  
月岡 良太<sup>4)</sup>、森澤 あずさ<sup>4)</sup>、大石 美也<sup>4)</sup>

- 1)株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 手稲稲積店
- 2)株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 旭川医大店
- 3)株式会社アインファーマシーズ
- 4)株式会社アインホールディングス

【目的】吸入手技の不良は喘息コントロールの不良、増悪リスクや副作用の増加につながる。したがって、薬局薬剤師の吸入指導は重要な意味を持ち、必要に応じて文書等による医療機関への情報提供を行うことは、安全かつ効果的な薬物治療に貢献する。そこで、薬局薬剤師による吸入指導時に医療機関への情報提供が必要となった事例の特徴から、吸入薬指導時の着眼点について考察した。

【方法】当薬局で2019年9月から2020年8月に医療機関に提出した吸入指導に関するトレーシングレポート59件を、薬局薬剤師の指導点から「グループ1:手技・手順の理解不十分」「グループ2:身体的要因での吸入不十分」「グループ3:うがい不十分等での副作用の疑い」に重複を許して分類し、その指導内容を調査した。本研究は、アイングループ医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:AHD-0070)。

【結果】グループ1は8件(13.6%)、グループ2は39件(66.1%)、グループ3は21件(35.6%)であった。主な指導内容は、グループ1では「空打ち理解不十分(62.5%)」が、グループ2では「吸気力不足(76.9%)」が、グループ3では「嘔声(76.2%)」が最も多かった。各グループの65歳以上の患者(以下、高齢者)の割合はそれぞれ75.0%、51.3%、47.6%であった。

【考察】グループ2の件数が最も多かったことから、患者の身体的特徴に合わせたデバイスの選択を積極的に提案する必要性が考えられた。グループ1の高齢者比率は高く、薬局薬剤師が患者の認知能力に合わせて説明できていない可能性も示唆された。グループ3は高齢者比率が他グループよりも低く、患者の認知能力ではなく、副作用防止という目的と重要性を十分に説明できておらず、省略されている可能性が示唆された。薬局薬剤師による適切な吸入指導と医療機関への情報共有は吸入薬治療の成功に大きく寄与するため、本結果も参考に適切な吸入指導に取り組んでいきたい。

(第15回日本薬局学会学術総会(2021年11月, Web)にて発表)